



「大船鉾」が 150 年ぶりに都大路を巡行



大船鉾は 15 世紀に建立され、後祭（当時旧暦の 6 月 14 日）の殿（しんがり）を務めていましたが、元治元年(1864)の蛤御門の変による大火によって船形の木組みや車輪を焼失してしまいました。以後残った神功皇后の御神面や懸装品を飾る「居祭」を百年以上にわたって続けてきましたが、町内住人の減少・高齢化により平成 7 年にはこの居祭も中止となりました。

以来途絶えていた宵山の「飾り席」は、平成 18 年、12 年ぶりに復活されました。

この年から粽授与のお手伝いを都草会員・関係者の皆様にご協力をいただき、宵山に賑いを添えて下さいました。

平成 21 年、大船鉾を含む「京都祇園祭の山鉾行事」がユネスコの無形文化遺産に登録されたのを機に、大船鉾復興への機運が高まってきました。同 23 年「京都市無形文化遺産展示室」オープンに際し、鉾の檣木部を新調披露しました。以来多くの方に大船鉾を知って頂きました。



翌 24 年には、御神体を入れた唐櫃を担いで「唐櫃巡行」という形で、142 年ぶりに行列に参加しました。

そしてこのたび、多くの方々の願いが叶い、150 年ぶりに、大船鉾本体での巡行復帰を果たすことになりました。7 月 24 日には 49 年ぶりに後祭が復活し、都大路を巡行する事ができました。囃方として大船鉾にかかわってきた私が、神宮皇后様と共に大海原を凱旋しているがごとく、勇壮と進む鉾の上でお囃子を奏でた感動は言葉にする事が出来ません。

今年の宵山では

大船鉾の鉾町である四条町に念願の鉾が建ちました。夕暮れからは駒形提灯の灯がともり、祇園囃子の音色や「ちまきどうですか〜」の音が響く中、注目を集めた大船鉾には想像以上たくさんの方がお見えになりました。

暑い中、沿道にて、私にお声をかけて頂きました方々、誠にありがとうございました。心よりお礼申し上げます。また、大船鉾の宵山期間中に御奉仕いただきました都草 坂本理事長、小松様、会員の皆様、さらに、平安女学院、華頂短期大学の皆様方に、心より厚く御礼申し上げます。今後共、どうぞ宜しくお願い申し上げます。



公益財団法人 四条町大船鉾保存会監事
(会員 松村 成昭)

シンポジウム「世界遺産のあるまちで暮らす」のパネルトークに出演して

6 月 19 日、立命館大学朱雀キャンパスホールにおいて、世界遺産「古都京都の文化財」登録 20 周年記念シンポジウム「世界遺産のあるまちで暮らす」が開催されました。

主催は、明日の京都文化遺産プラットフォーム（私は、企画・調整委員会のメンバー）で前半の記念講演はベニシア・スタンリー・スミス氏（ハーブ研究家）による「Life is an Art ～心豊かに生きるために～」がおこなわれました。後半のパネルトークでは梅 承昭氏（天竜寺 宗務総長）、益田兼房氏（ICOMOS-ICORP 執行委員）、松浦晃一郎氏（前ユネスコ事務局長）、そして坂本がパネリスト、コーディネーターは聖護院門跡 門主の宮城泰年氏が務められました。

まず世界遺産「古都京都の文化財」の登録経過や日本の現状についての報告の後、世界遺産と暮らす私たちが先祖から受け継いできた文化遺産を未来につなげていくためには、防災・防火はもちろんのこと、マナーを守り、ルールを守るという日本人が培ってきた心を育んでいくことが大切であるのではないかといった内容のトークが展開されました。

私からは次のようなお話を致しました。私たち市民にとっては、世界文化遺産は観光の対象ではなく、もっと身近なものであること。京都御苑周辺の景観や鴨川の景観などのように大事なものは守り、残していこうという京都市民の意識が根底にあること。この事が京町屋の保存や文化財の保全・継承に繋がっていること、など。パネルトークに参加するにあたって、シンポジウムのテーマである世界遺産に関して様々な情報提供やアドバイスをしていただいた皆様に感謝申し上げます。（理事長 坂本 孝志）



シンポジウムを聴講して

聖護院門跡 宮城泰年門主の司会で、ICOMOS 執行委員 益田兼房氏、天龍寺 宗務総長 梅 承昭氏、前ユネスコ事務局長 松浦晃一郎氏、我が都草 坂本理事長の 5 人でパネルトークが始まった。挨拶代わりに各自がそれぞれの立場から現状や取り組み・思い等を話され、坂本理事長の「世界遺産のあるまちで暮らすのは誇り」とのコメントは会場から大きな拍手を呼んだ。出席者に共通していたことは、①京都の原風景をいかに残していくか、②保全には地域社会の役割が重要、③地震・火災対策の充実などであった。また、観光客のマナーの悪さの問題も出た。さらに、世界遺産の遺産という言葉の意味は本来「相続したもの、引き継いだもの」であると、松浦氏から説明があった（納得）。最後に、宮城門主が「先祖から伝えられた世界遺産、それを未来に伝える」、この世界遺産の理念でシンポジウムを締めくくられた。（会員 森川 恒雄）

自然やまちを愛することで

「世界遺産のあるまちで暮らす」をテーマとしたシンポジウムに参加。講師のベニシアさん（大原在住のハーブ研究家）からは、「美しく生き地球を汚さないで」「ゆっくり呼吸でリラックスする」などの話がありました。「おおらかに、呼吸を意識すること」が、今回私が学んだ実践内容です。

パネルトークでは、坂本理事長が「御所を覗く建物を建てたらあかん」と昔から都人の心意気があるなど、自然やまちを愛することが文化遺産を守ることに繋がるとの話。講師やパネリストの方々には造詣が深く、はつらつと意見を述べられ見習うこと多し。「歴史や地域の事を学び、人を愛し、後世に伝える役目とならねば」との思いを強くした一日でした。（会員 渡邊 日出夫）